

《楽曲解説》

解説＝野本 由紀夫

9/10 第86回サントリー定期シリーズ

9/11 第96回東京オペラシティ定期シリーズ

サントリー

9/10

オペラシティ

9/11

オーチャード

9/22

本日の定期演奏会について

首席客演指揮者となったバッティストーニと東京フィルの直近の定期演奏会といえば、今年5月の『トウランドット』のコンサート・オペラ上演と、イタリアン・シンフォニック・プログラムがすごかった。ブラボーの嵐、鳥肌立つ大熱演であった。東京フィルが新しい時代に入ったことを内外に示した、間違いなく画期的な名演を経験したのである。

9月もバッティストーニの意欲的なプログラムである。

ずばりテーマは、「ロシア」であろう。たとえばラフマニノフとムソルグスキーを取り上げているのだから。しかも、ラフマニノフは「絵画的練習曲」、ムソルグスキーは『展覧会の絵』と、「絵画」つながりにしているのも面白い。

しかし、テーマ性はもっともっと奥が深いようだ。なにしろ、バッティストーニが得意とするヴェルディの『運命の力』は、初稿の初演が Санкт-Петербург、つまりロシアなのだ。ラフマニノフとムソルグスキーのピアノ曲集をオーケストラ編曲するように委嘱した人物も、ロシア出身の大指揮者、クーセヴィツキーであった。

これだけではない。どうやら「イタリア」とのつながりも考えられているようだ。ヴェルディもイタリア人だが、ラフマニノフが取り上げたパガニーニも、言うまでもなくイタリアのヴァイオリンの鬼才であった。さらに、ラフマニノフのピアノ曲をアレンジしたのは、イタリア人のレスピーギなのである。

まだ20代のバッティストーニ、恐るべし！ 今月も興奮のつぼとなるだろう。

ヴェルディ (1813-1901) 歌劇『運命の力』序曲

9/10 9/11

『運命の力』は、イタリア・オペラの巨匠、ヴェルディが48～49歳で作曲した、22番目のオペラ。サンクトペテルブルクのマリンスキー劇場からの委嘱作品であった。

同オペラは1862年に同劇場で初演されたが、主要な登場人物が全員死んでしまうという悲惨な結末に加え、主人公が修道院長に向かって最期に口にする捨て台詞「馬鹿野郎」が、カトリックの国々では宗教上問題となった。ヴェルディもずっと気にしており、1868年に手直しに取り掛かり、主人公が最後に身投げしない改訂版が1869年にミラノ・スカラ座で初演された。

1862年の初稿では短い前奏曲だったものを、この1869年改訂版のときに差し換えたのが、本日演奏される有名な序曲である。ヴェルディの序曲のなかでも、屈指の名曲として知られる。

オペラの舞台は、18世紀中頃のスペイン。侯爵の娘レオノーラは、アルヴァーロと相思相愛の仲である。しかし、アルヴァーロがインカ帝国の血を引いていることを理由に、伯爵は結婚を認めない。

ふたりは駆け落ちを決意するが、それを伯爵が見つけた現場で、不幸が襲う。銃の暴発で、伯爵が事故死したのだ。レオノーラの兄ドン・カルロは父の敵を取

べく、ふたりを追いかける。

ふたりは別々に逃げるものの、おたが

いに相手は死んでしまったと思ひこむ。ひよんなことからアルヴァーロは兄カルロと出会い、決闘することになる。その結果、彼は兄に瀕死の傷を負わせてしまう。

臨終を見取ってもらうために修道士のいる洞窟に向かうと、そこにはレオノーラ。カルロは最後の力を振り絞って、妹レオノーラを刺し殺す。運命を呪おうとするアルヴァーロ。それを制する神父。彼女の死を看取って、幕が下りる。

序曲は、オペラの総集編とも呼べるほどドラマチックである。

冒頭のトロンボーンのリズムは、レオノーラの祈りとともに現れる「変えることのできない運命」を表す。その直後の「ラシドミ・ラシドミ」という弦楽器のメロディは、「運命のモチーフ」である。静かになった箇所クラリネットのメロディは、レオノーラと神父の二重唱のテーマである。

ほとんど小交響曲とも呼べるほど緻密にモチーフが展開され、ドラマチックな終わりを迎える。

[楽器編成] ピッコロ、フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ(チンパッソ)、ティンパニ、大太鼓、シンバル、ハープ2、弦楽5部

ラフマニノフ (1873-1943) (レスピーギ編) 5つの絵画的練習曲

9/10

じつは、本日のメイン曲『展覧会の絵』の異母兄弟とでもいえる作品が、レスピーギ編曲によるラフマニノフの「5つの絵画的練習曲」である。

そもそもオーケストラ編曲の天才、イタリアのレスピーギ(1879-1936)に、ラフマニノフ(1873-1943)のピアノ原曲をアレンジするように依頼したのは、大指揮者クーセヴィツキー(1874-1951)である。

ピンと来る人もいるだろう。そう、ラヴェル(1875-1937)に『展覧会の絵』の編曲を委嘱した張本人である。ラヴェル版『展覧会の絵』(1922)の大成功で味を占めたクーセヴィツキーが、まさに「二匹目のドジョウ」を狙ってレスピーギに委嘱(1931)したのが、この「5つの絵画的練習曲」なのである。

原曲は、作品33(全8曲)と作品39(全9曲)のなかの5曲である。原曲のうち作品33は、ラフマニノフがピアニストおよび指揮者として忙殺されていた1911年の夏休みに書かれた。

その後、さらに作品39が追加された。作曲は、1916年8月、10月、翌年2月、まさに第一次世界大戦のさなかであった。翌年、ロシア革命が起こるぐらいだから、政情も不安定な時期であった。

こうして44歳で完成した作品39は、ラフマニノフがロシアを離れるまえに作曲し、かつ彼自身が演奏した最後のピアノ

曲集となった。ちなみに、両曲集を合わせて、ピアノ業界では『音の絵』という曲集名で呼ばれることも多い。

ところで、タイトルの「絵画的」というのは、かねてから感銘を受けていたスイスの象徴主義の画家、アルノルト・ベックリン(1827-1901)の絵画からの影響ともいわれる。ちなみに象徴主義とは、印象主義のように直接的な風景からではなく、神話などから想像を膨らませて絵画にする一派である。

ラフマニノフが、具体的にどの絵に靈感を受けたのかは、知られていない。ある程度、題材がわかっているのは、5曲だけである。それがまさに今日お聴きいただく、レスピーギの編曲によるオーケストラ版の5曲なのである。

ラフマニノフは次のようなタイトルを挙げている。原曲順に、作品33の第7番「謝肉祭の情景」、作品39の第2番「海とかもめ」、同第6番「赤ずきんちゃんと狼」、同第7番「葬送行進曲」、同第9番「東洋の行進曲」。

うすうすお気づきかと思われるが、レスピーギ版はラヴェル編の『展覧会の絵』ほどにはオーケストラ・レパートリーとして定着していない。しかし、ラフマニノフの作曲の題材を明らかにした点では、一つの功績があったといえよう。もっと演奏されてよい曲集である。

第1曲「海とかもめ」 レントのゆっく

りした曲で、5曲中もっとも長い8分の作品。

まず、静かに波打つ弦楽器の弱音ではじまる。第1ヴァイオリンとチェロは、かもめと海の対話であろうか。この対話を、楽器を変えながら続けていく。途中、2回全員の強音(トゥッティ)があり、大波となって不安げな音楽となるが、やがてふたたび最初の音楽へと静まっていく。最後は透明な響きを残して消えていく。

第2曲「謝肉祭の情景」 わずか2分弱の曲だが、金管楽器や打楽器も活躍して、熱狂的な音楽が繰り出される。

第3曲「葬送行進曲」 7分ほどの葬送行進曲。行進曲でありながら、2拍子系でない3拍子もところどころに挟まっている。

まず管楽器を中心としたハ短調から始まる。その後、弦楽器を主体とする区分となり、やがて変ホ短調というくすんだ調の部分になる。大きなクライマックスを迎えると、再び音楽はハ短調となり、最後はあきらめたかのように、静かに終わっていく。

第4曲「赤ずきんちゃんと狼」 3分ほどの小曲。出だしの低音の半音階は、不

気味な狼であろう。直後の軽快な音楽は、赤ずきんちゃんだ。

曲は童話を追うものではなく、無防備で危なっかしい赤ずきんと、狡猾な狼の性格描写といったところ。

第5曲「東洋の行進曲」 ピアノの原曲でも曲集を締めくくる勇壮な行進曲で、華麗で技巧的な曲である。レスピーギのオーケストレーションはたいへん想像力に富んだもので、冒頭からよく鳴り響く。全曲を通して「タタター」のリズムが聴こえる。弱音器付きのトランペットも活躍する。

中間部は弦楽器主体の部分で、行進曲なのに3拍子の小節がはさまるなど、ヨーロッパのそれとは少々異なった、エキゾチックなリズム感を醸し出す。

ふたたび弱音器付きのトランペットが細かい動きを見せ、「タタター」のリズムが繰り返されるなか、元気よく快活に曲を閉じる。

【楽器編成】 フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、小太鼓(フィールド・ドラム)、大太鼓、シンバル、サスペンド・シンバル、タンブリン、タムタム、グロッケンシュピール、チャイム、ハーブ、弦楽5部

ラフマニノフ(1873-1943) パガニーニの主題による狂詩曲 作品43

1868年が明治元年だから、セルгей・ラフマニノフ(1873-1943)は明治6年からロシアで生まれ、昭和18年まで生きた作曲家である。ロシア革命(1917)が大

正6年、太平洋戦争が昭和16年(1941)から20年(1945)までだから、彼が生きた時代や、おおよその世界情勢をイメージしていただけるだろう。

音楽史的に見ると、ラフマニノフのすぐ翌年にシェーンベルク(12音技法という無調音楽の作曲法を確立した作曲家)が生まれ、そのまた翌年にラヴェル(印象主義の作曲家)が生まれている。

それを考えると、ラフマニノフの音楽の方向性は、ヨーロッパの同時代人とはずいぶん異なっていたことがわかる。最近、この作曲家の演奏頻度がたいへんな勢いで増えているのは、19世紀的なロマンチックな叙情性が、現代人にとって一種の心のオアシスになるからではないだろうか。

明治42年(1909)にはじめてアメリカへ演奏旅行に出かけたラフマニノフは、それ以後ピアニストとしても、指揮者としても多忙を極めることになる。作曲は夏の休暇にしかできなかった。

ラフマニノフのアメリカへの亡命後に書かれた数少ない作品のなかで、もっとも有名な作品が「パガニーニの主題による狂詩曲」である。61歳のときの作品で、実質的に5番目のピアノ協奏曲であり、編曲作品を除けば彼が書いた最後のピアノ曲である。

この作品は1934年7月3日から8月24日にかけて、ルツェルン湖畔の別荘で作曲された。前年、ドイツではヒトラーのナチス政権が樹立し、世界が破局へと動きはじめていた時期であった。

音楽的には、パガニーニの主題にもとづく「変奏曲」の形をとる。その主題は、ヴァイオリンの鬼才、パガニーニ(1782-1840)の代表作中の代表作、ヴァイオ

リン独奏のための『24のカプリッチオ』(1805年ごろ)第24番の主題だ。

「ラッ・ラ・ラドシラ|ミッ・ミ・ミソファ|ラッ・ラ・ラドシラ|ミー・ミー」という、耳に残りやすい、あの特徴的な主題である。ここでは「パガニーニ主題」と呼んでおこう。

この主題は多くの作曲家を魅了し、リスト、シューマン、ブラームス、シマノフスキ、ルトスワフスキらの傑作が生まれている。

ラフマニノフでは、序奏と主題の後、24の変奏曲と壮大なコーダ(終結部)がつづく。変奏曲としても、かなり自由な運び方を取っている。

パガニーニ主題中の「ラドシラ」の部分を使った短い序奏の後、主題の呈示もされないうちに、なんといきなり第1変奏。そのあとになって、おもむろにパガニーニ主題がヴァイオリン群で演奏される。

その後の変奏はほぼ20秒前後でどんどん進んでいくので、注目箇所だけ触れておこう。

第7変奏と第10変奏では、ピアノに『ディエス・イレ(怒りの日)』(グレゴリオ聖歌に取り入れられた賛歌)が登場する。ラフマニノフは最晩年にこの賛歌を何度も使っており、他では『交響的舞曲』(1940年、最後のオーケストラ作品)が顕著な例である。

「パガニーニ狂詩曲」のなかでもっとも有名なのが、第18変奏曲であろう。おそらく誰もが耳にしたことのあるロマ

ンチックで甘美な音楽である。ここが弾きたいから、この曲を選ぶというピアノリストも多い。

この変奏は、じつはパガニーニ主題に含まれていた「ラドシラミ」という音型を、上下さかさまの動きにして「ラトファソトトラレト」にしたもの。ロマンチックに聴こえるが、なかなかの理論派の作曲家だったことを見逃してはなるまい。

やがてオーケストラが参入したとき、ピアノが弾く「三連符」(「3つ刻み」)の和音と、オーケストラのメロディの十六分音符(つまり「4つ刻み」)が織りなす、リズムのフレア(波長が異なるために起こる干渉現象)が心に沁みわたる。

その後、ピアノ独奏は技巧的かつ華麗に動き回る。パラパラと指回りのテクニックが必要なだけでなく、握力を必要とする重々しい和音の連続なども多く、軽快さと同時にダイナミックさも要求される作品である。

最後にもう一度『ディエス・イレ』が金管群を中心に登場してクライマックスを築くと、強音で終わるかと思わせておいて、パガニーニ主題のなかから「ミソファミラ」だけが回想されて、弱音のなか余韻を残して終わる。

[楽器編成] 独奏ピアノ、ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、ハープ、弦楽5部

ムソルグスキー(1839-1881) (ラヴェル編) 組曲『展覧会の絵』

9/10 9/11

原曲はピアノ独奏曲。モデスト・ムソルグスキー(1839-1881)は、ロシア5人組「力強い仲間」のひとりとして知られる。

彼にはヴィクトル・ハルトマン(ロシア語読みではガルトマン)(1834-1873)というドイツ系ロシア人の親友がいた。彼は建築家でデザイナーでもあったが、1873年7月23日、動脈瘤が破裂して39歳の若さで急死した。ムソルグスキーはたいへんなショックを受け、2日間も寝込んでいる。

翌年2月、友人たちの奔走でハルトマンの遺作展がベテルブルクで開催された。そのとき見た400点ほどの絵画と設

計図(といっても、紙の大きさはハガキ大から、せいぜい小中学校の机の大きさ程度)の印象から、ムソルグスキーはハルトマンを追悼するピアノ組曲を書いたとされる。

作曲は、1874年6月初旬から22日までの、非常に短い日数で完成したらしい。しかし、この作品の真価が認められるようになるのは、半世紀もあとのこと。1922年にラヴェル(1875-1937)が大指揮者クーセヴィツキー(1874-1951)の委嘱でオーケストラ編曲し、大成功を収めてからである。

ピアノの原曲は、10曲と5回の「プロム

ナード」からなる。「プロムナード」とは、フランス語で「散策」という意味なので、遺作展でハルトマンの作品を見て回るムソルグスキー自身を表しているのだろう。

「プロムナード」は、前奏曲や間奏曲の機能を果たす。ラヴェルのオーケストラ編曲版では、原曲で5回あるうちの第6曲と第7曲のあいだの「プロムナード」はカットされている。

プロムナード トランペット・ソロで明るくはじまる「序曲」の機能を果たす曲。トランペットでの開始は、軍楽隊の国、フランス以外では考えられなかった。

第1曲「グノームス」 地中の財宝を守る妖精がグノーム(こびと)である。ラヴェルの編曲は、あまりにもイメージネーションに富んでいてすごい。

プロムナード ホルン・ソロにはじまる木管アンサンブルの色彩の強い間奏曲。静かな雰囲気のまま次の曲へ移行する。

第2曲「古城」 中世の古城の傍らで歌う吟遊詩人。原画は不明。アルト・サクスのふくよかな調べが美しい。

プロムナード 再びトランペットで開始される間奏曲。ある絵に心を奪われて立ち止まったかのように、ピッツィカート(=弓を使わず、指で弦をはじく奏法)で歩みが中断される。

第3曲「テュイルリー公園」 テュイルリー公園とは、パリのルーヴル美術館(つまり宮殿)前にある有名な庭園のこと。ハルトマンの絵では、おおぜいの子

供たちと、女性家庭教師たちのいるテュイルリー公園の並木道が描かれていたという。ムソルグスキーは、この曲の副題として、「遊びのあとの子供のけんか」と手紙に書いている。

第4曲「ブイドウオ(ビドロ)」 ムソルグスキーによれば、サンドミエシュのブイドウオ(ビドロ)の絵だったという。

サンドミエシュはワルシャワの南にある町で、当時ロシア領。ポーランド王国だったころから社会変革の意識の高い土地として有名だった。

ブイドウオは、ポーランド語では農耕用の家畜、とくに「牛」のことだという。おそらく抑圧された民衆が象徴されている、という説も有力だ。ユーフォニアム独奏が印象的である。

プロムナード 場面転換を思わせる短調の間奏曲。

第5曲「卵の殻をつけたひなどりのバレエ」 ハルトマンの絵は、ゲルバー(1831-1883)が作曲したバレエ『トリルビ』のための衣装デザイン画である。

この曲におけるラヴェルのオーケストラ編曲は、神がかっている。たとえば、小太鼓の右のバチは普通に太鼓の膜をたたき、左のバチは楽器の金属ワクをたたくように指示されている(ステージにご注目!)

第6曲「サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ」 この曲の原画は2枚。1枚は毛皮の帽子をかぶった、ポーランドの金持ちのユダヤ人を描いたもの。ゴールデンベルクはよくあるユダヤ人の苗字

だが、「黄金の山」という意味。

もう1枚は、貧しく迫害と差別に苦しむ白髪のポーランドのユダヤ人の絵である。金持ちのほうは、木管と弦楽器のユニゾンで、貧しいほうは弱音器付きのトランペットで卑屈な感じに演奏される。

第7曲「リモージュの市場」 リモージュはフランス中部の町で、陶磁器で有名。市場に集まった女性たちのおしゃべりのようすを描いている。ドタバタと次の曲に入る。

第8曲「カタコンブ——死者タチトモニ死セル言葉デ」 原画は、パリにある古代の地下廟を、ハルトマンらがたいまつを頼りに気味悪そうに見学している自画像(後ろ姿がハルトマン)である。金管楽器の分厚い響きによる楽曲が「カタコンブ」の部分。

そのまま引き続いてラテン語で「死者タチトモニ死セル言葉デ」と題された部分が奏される。親友ハルトマンを追悼する曲であることは明らかだ。音楽は「プロムナード」の旋律であり、第9曲への間奏部の機能も果たす。最後は、天国に召されたかのように、ハーブの上行音と弦楽器のハーモニクス(=倍音奏法)で透明に終わる。

第9曲「鶏の足の上の小屋」 原画は、時計のデザイン画。ロシア民話の魔女、バーバ・ヤーガが住む鶏の足のうえの高床式の小屋がデザイン化されてい

る。音楽は、うすに乗って飛び回るこの魔女のようすを、生き生きと描いている。

第10曲「キエフの大門」 キエフは、ウクライナの古都で、かつてはロシアの首都であった。ハルトマンの絵は、1866年に作成された「キエフの門」の設計図。曲集中いちばん大きな絵だが、それでもわずかに42.9×60.8cmのサイズである。中世のロシア正教会を思わせる、たまねぎ型の屋根をもち、頂上には双頭の鷲が飾られ、幼子キリストを抱く聖母のイコンがはめ込まれている。一番高い鐘楼には鐘が3つ見える。

途中、クラリネットとファゴットでロシア正教会の賛歌「キリストによって洗礼を受けたものは」が聴こえる。鐘の音とともにグロッケンシュピール(鉄琴)で「プロムナード」の旋律も再現され、圧倒的な音楽は、鐘の強奏とともに、深い感動を残して幕を閉じる。

[楽器編成] フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ3(3番はイングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルト・サクソフオン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ユーフォニアム、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンド・シンバル、トライアングル、タムタム、シロフォン、グロッケンシュピール、ラチェット、むち、チャイム(D#)、ハーブ2、チェレスタ、弦楽5部

のもと・ゆきお(音楽学) / 桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部芸術教育学科教授(音楽史、鑑賞理論、指揮法)。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」の元監修・解説者、同「ららら♪クラシック」のららら委員長、Eテレ学校番組「おんがくプラボー」番組委員。来たる10月11日に、シュベルト=G.カサド編曲の「アルペジオ・ネ協奏曲」を指揮予定。